

ツインズ誕生に思う

アビリティガーデン遠隔通信事業課の鯨坂純朗と申します。雇用促進事業団が提供しているホワイトカラー向けの衛星通信番組（愛称アビリティガーデンネット）で、番組制作に携わっています。よろしくお願いたします。

前回の米山毅さんとは、ポリテクセンター石川でご一緒させていただきました。訓大（現能開大）溶接科の大先輩で、私が石川に赴任したときには、すでに溶接のベテラン指導員として活躍されていました。ところが、私は能開セミナー受付係と情報管理科の兼務ということで、ほとんど溶接の担当をすることはありませんでした。ですから、溶接について米山さんからご指導いただいた記憶はほとんどない

のですが、指導員としてのあり方や仕事への取り組み姿勢、人との付き合い方などをその後ろ姿から学んだように思います。石川には7年半いましたが、年数を経るに従い、団体や企業関係の仕事で米山さんと一緒に仕事をすることが多くなってきました。ある団体向けの職業能力開発体系図を米山さん含めみんなで夜遅くまでかかって作ったことも、石川での忘れられない思い出です。この4月から事業団本部に異動され、職場同士が近くなりましたので心強く思っています。

話は変わりますが、今年の1月に双子（2卵性）の女の子が誕生しました。当初から多胎児とわかっ

秀句つれづれぐさ

本宮 鼎三

生家とて嫁せばまらうと菊臈 いのうえかつこ

句集『奉納』所収、平六作。この作の「まらうと」は現代かなづかいならば「まろうと」、「つまり「客人」、「賓」一字でも、こう読む。この句の季語は「菊臈」。食用菊の花びらを茹でて三杯酢などで和えたもの。この句の大意を一口でいえば、嫁ぎ先から実家へ稀に里帰りした女性の悲哀、感傷というもの。

とにかく俳句は今や女流優位時代。角川書店刊などの俳句総合誌は常に女性特集。この作家も時代の潮流に乗っている一人。俳人協会新人賞、「畦」賞受賞、故上田五千石門、「かなえ」同人。

煩杖にかなふ小机鳥渡る

志賀 佳世子

句集『尖塔』所収、平三作。やはり気鋭の女流俳人の句。「鳥渡る」は秋になって北方から渡ってくる鳥をいう。主に鴨、雁など、この同類の秋の季語としては、「小鳥来る」、「色鳥」などがある。この作家は音楽をはじめ多彩の芸才の持ち主、要するに趣味の領域を越えての専門家。この作は、「杖」などと表白しているが、美しき詩の世界に思いを馳せているときの自画像と私は感受した。藤田湘子門、「鷹エッセイ賞」、「同新葉賞」など受賞。「鷹」同人。

ていたのですが、1人目の長男（3歳）のときとは違い、いろいろな制約を受け、また、母体への負担も大きくて随分と心配しました。結局は、思いのほか安産で生まれ—安心。しかし、そこからが大変。産まれて1ヵ月もたたずに長女が無呼吸発作で3週間近く入院するは、2ヵ月半目には長女、次女ともに風邪をこじらせて入院するはと、小さく産まれたために健康状態が安定しませんでした。手のかかる上の子を抱えての双子の育児は、想像以上に大変です。今回感じたのは、こうした多胎児を抱えた家族に対する行政政策の遅れです。私が住んでいる市の保育園に、長男を預かってもらえないかを市役所にうかがいましたが、両親が働いている人のための保育園だから、育児のために入園させることはできないとのこと。周りに身よりのない私たちにとってはショックな回答でした。結局は保育園に直接かけ合い、そのご厚意で入園できることになったのですが、もう少し行政側が多胎児家族の現状に目を向けてくれればいいなと感じた次第です。

さて、私が次に紹介する方は、熊本県立技術短期大学校生産技術科講師の中野貴之さんです。中野さ

んと私は不思議といろいろな縁があり、公私にわたってお付き合いさせていただいています。まとめると、ざっと以下のような感じです。

その1 出身校の訓大（能開大）では機械科（中野さん）と溶接科（私）という関係ながら、よく同じ授業を受けていた。

その2 彼のご両親の出身が私の実家のある町（鹿児島県鶴田町）と一緒に来たときに、何回か会ったこともある。

その3 お互いの最初の赴任地が富山（中野さん）と石川（私）で、車で1時間ほどの距離だったのでよく行き来して遊んだ。

中野さんは熱血漢で真面目で仕事熱心な人です。今の職場では、準備室の頃から機器やカリキュラムの整備などでその手腕を発揮され、今は講師として忙しい毎日を送っていらっしゃいます。彼が事業団を離れて、生まれ故郷の熊本県の職員になったときには驚きましたが、現在の頑張っている様子をつかがうと私も啓発されます。それでは中野さん、熊本からよろしくお願いします。

リレートーク【2】

長野雇用促進センター 山田 裕介

闘魂のメッセージ

全国のリレートーク愛読者の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。私、長野雇用促進センターの山田裕介と申します。前走者の村松一貴さんは、この4月に長野雇用促進センターからアピリティガーデンへ異動されましたが、長野では村松さんに公私とも非常にお世話になり、また、転勤の置き土産にこのリレートークの原稿執筆までいただきまして、たいへん光栄に思っております。

このような重大な任務を、私ごとが全うできるか自信はありませんが、村松さんの顔に泥を塗らないために、頑張ってみたいと思います。

さて、本題に入るわけですが、今回は少々カルトなプロレスネタについて書いてみます。

1998年4月4日、偉大なレスラーがプロレスのマットから、引退しました。彼の名は、アントニオ猪木。猪木に対する世間の評価がどうかは知りませんが、私にとって猪木は、男のロマンを見せてくれた人物であります。

私がプロレスを見始めたのは、ちょうど初代タイガーマスクが活躍し、新日本プロレスが大人気だった頃です。当時の新日本プロレスは金曜の夜8時からの放送で、私も毎週楽しみにしていたものでした。当時の私は、猪木よりもタイガーマス

クの方が好きだったような気がします。

しかし、いつのまにか私にとってのナンバー1のレスラーは、アントニオ猪木になっていました。いつ、どうしてそうなったのかは、自分でもよく記憶してはいないのですが、彼のプロレスへの執念が、見る者を引きつけたとしかいいようがありません。リング外での彼の行動には、いろいろと批判もあるようですが、われわれ猪木ファンには、そういった声もすべて消化されてしまいます。それだけ猪木に心酔してしまったということでしょう。

引退間際の彼の試合も、むろん、それはそれで良かったのですが、私が好きだった時代は、ホーガン、アンドレ、ブッチャーといった外人勢や長州の率いる維新軍団と抗争を繰り広げていた時期で、そのときの彼の試合に一番熱狂したのを覚えています。なかでも、ホーガンのアックスボンバーで猪木が頭を鉄柱にぶっつけて、病院送りにされたときのことなどは、今でも鮮烈に心に残っております。また、プロディとの殺気ばった抗争も、われわれプロレスファンはスリルと興奮を覚えたものでした。今思うと、猪木の試合というものは、常にいつも紙一重で、そこが見る者をハラハラさせ、感動させたのかもしれない。

そんなアントニオ猪木も、去る4月4日に東京ドームにて、ついに現役を退きました。最後の彼の勇姿も素晴らしく、いいレスリングを見せてくれたと思います。いいレスラーは多くいるけれども、猪木のスケールに及ぶレスラーはもう現れないだろうなと、このとき、ふと考えたものです。そして、最後に彼は、われわれにこんな言葉を残してくれました。「この道を行けばどうなるものが危ぶむなけれ。危ぶめば道はなし。踏み出せば、その一足が道となる。迷わずに行けよ。行けばわかる」

これは、良寛和尚の言葉なのだそうですが、正直、私は今まで好きな言葉なんてものはありませんでした。しかし、この猪木の最後のメッセージは深く私の心に刻まれました。彼の見せてくれた闘う姿勢と、最後のメッセージは私にとって今後の人生の大きな支えになるような気がします。

さて、そうこうしているうちにそろそろ次の方を紹介しなければなりません。私も、どなたにバトンを渡そうか非常に苦慮したのですが、意表をつきま



して、アビリティガーデンから配信しておりますAGネット番組の中で全国に笑顔を振りまいてくれております「涌井えり子」さんを指名させていただきます。AGを担当している私がAGネットの画面上で一方的に拝見しているだけなので、涌井さんは私のことを知りません。が、全くつながりがなくもないので、涌井さん、どうかよろしくお願いします。